

特別陳列

六角氏と永源寺

平成 17 年 8 月 27 日 (土) ~ 10 月 2 日 (日)



絹本着色寂室元光像

六角氏は、近江源氏の一族佐々木氏の惣領家にあたり、織田信長の近江侵攻に至るまで、近江中世史の立役者でありつづけました。

永源寺は東近江市永源寺高野町に所在する臨済宗永源寺派の大本山です。開山の寂室元光(じゃくしつげんこう 1290~1367)は、大陸に参禅ののち各地を遍歴し、71歳のときに六角氏頼(ろっかくうじより 1326~70)と出会います。氏頼の帰依を受け、風光明媚な雷溪の地を献じられた寂室は、ここに永源寺を開き、亡くなるまで留まりました。永源寺の名は、氏頼の法名崇永から「永」の字を、近江源氏である六角氏の「源」から名づけたものとも伝えています。

中世における永源寺は、時には政治に翻弄される六角氏の余波を受けながらも、寂室の風を伝える禅刹として、発展を遂げてゆきます。

本展では、当館寄託の重要文化財永源寺文書を中心に、六角氏頼と寂室元光の交流に始まる中世の永源寺のありさまを、六角氏との関わりを中心に紹介いたします。

栗東歴史民俗博物館

一、林下の人 寂室元光

寂室元光（一二九〇～一三六七）は、美作国（現在の岡山県）に生まれ、
た。得度してまもない十五歳の頃には近江国栗太郡田上を訪れて、とある僧が
座禅している姿を目にして禅を志したと伝えます。のち鎌倉の約翁徳俊らに学
び、元応二年（一三三〇）には大陸に渡って中峰明本、元叟行端、古林清茂、
清拙正澄らに参禅しました。

最初に師資の礼をとった師の法を嗣ぐという当時の風潮から、寂室も約翁徳
俊の法嗣を名乗りました。しかし中峰明本の、終生官寺への栄転を固辞し、幻
住と称して各地を遍歴し、在野を貫いた生き方は、寂室に大きな影響を与えた
のです。

「林下（りんか）」とは、五山に代表されるような官寺（叢林そつりん）に
出世するのではなく、官寺の栄耀を避け在野を貫くありかたをいいます。まさに
寂室の生き方は、中峰明本にまなび「林下」に身を処したものといえるでしょ
う。

1 寂室元光像 自賛

絹本着色 縦一〇二・三 cm 横四七・三 cm 一幅

曲ロクに坐す寂室の姿を、右斜め前方から描く。残念ながら傷みが激しく、
相貌はあきらかでないが、顔や手には細筆で輪郭をとり、衣は肥瘦のある墨線
で描いている。

上部には賛が記され、現状ではほとんど読み取ることとはできないものの、寂
室自らの筆跡とみられる。

寂室の師である約翁徳俊、さらに約翁徳俊の師である蘭溪道隆の画幅とともに
三幅対に仕立てられている。

2 開山誕生慈父祝歌

重要文化財 永源寺文書のうち 一幅

紙本墨書 縦三〇・一 cm 横四一・九 cm
「こまほうがむまれ（高麗房の誕生）」と題し、「こまほう（高麗房）」こと寂
室元光の誕生を祝い、その父が詠んだ歌と伝える。

正応三年（一二九〇）五月一日申の刻（午後三時から五時頃）という出生
日時を詞書に、わが子が未永く健やかに育つことを祈る歌を三首並べている。
永源寺第二世弥天永釈の編とも伝える『寂室和尚行状』によると、父は小野
宮実頼の子孫、母は平氏。母が昼寝に、わが子が既に産まれ、その身から発す
る光が室内を照らすのを夢見て、寂室が生まれたという。

3 約翁徳俊像 自賛

重要文化財 一幅

絹本着色 縦一〇・一 cm 横五二・四 cm
南北朝時代 文保三年（一二一九）賛

約翁徳俊（一二四五～一二三〇）は寂室の師。寂室は一六歳で鎌倉に向かい、
約翁に師事した。寂室と出会う前夜、約翁は光明が山野を照らす夢を見て、元
光の法諱を与えたという。

寂室が一八歳のとき、重い病に臥した師に末期の一句をたずね、そのような
質問が今更出るのは常日頃から生死のことを考えていないからだ、と、約翁に一
発殴られて悟った。

上方の賛は約翁が七五歳のとき、心鏡大師の求めに応じて自ら記したものの。
画は全体に大らかながら、厳しい眼差しを見せている。

4 三千仏名経

紙本墨書 縦三二・七 cm 三巻

南北朝時代
過去、現在、未来に出現するとされる、それぞれ千にわたる仏の名を連ねた
もの。何度にも分けて書き継いだよう、場所によって字の大きさや崩し具合

にかなりの差がある。また誤字や書き飛ばした部分などには校正を加えてある。奥書や署名等は存在しないが、若い頃の勉学時代の寂室の筆として伝えられてきた。

5 足利義詮公帖

一通

重要文化財 永源寺文書のうち

紙本墨書 縦三三・一 cm 横四三・八 cm

康安二年（一三六二）二月一七日付

本状は同年二月一五日付けの後光厳天皇からの繪旨をうけて、京都の天龍寺の住持を命じる。天龍寺は当時、五山の中でも二番目に位置づけられていた。

このとき寂室七三歳。前年に、六角氏頼からの寄進をうけて、雷溪に永源寺を開いたばかりであった。繪旨の文面にも「早く雷溪の幽栖を辞し、龜山（＝天龍寺）の禅利に入りて叢林の軌範を紹隆せしめ、邦家（＝国家）の安泰を祈り奉るべし」とある。

6 足利義詮公帖

一通

重要文化財 永源寺文書のうち

紙本墨書 縦三三・九 cm 横四四・四 cm

貞治二年（一三六三）正月三〇日付

天龍寺にひきつづき、翌年には五山のトップに位置づけられていた建長寺の住持を任じられている。

文面に「師跡の再興を専らにせらるべし」とあるが、建長寺の開山蘭溪道隆は、寂室が師事した約翁徳儉の師で、寂室にとつても師匠筋にあたる。寂室は幕府からの使者を避けて伊勢に赴き、ほとぼりがさめてのち永源寺に戻った。

7 足利義詮公帖

一通

重要文化財 永源寺文書のうち

紙本墨書 縦三三・二 cm 横四四・三 cm

観応元年（一三五〇）七月九日付
寂室の生涯最初の公帖。室町幕府二代將軍足利義詮から、当時六一歳であった寂室に対して、相模国長勝寺の住持を任命する。

当時諸山であったとみられる長勝寺は、寂室の師約翁徳儉を開山とする。「門徒の吹拳を守り、執務せらるべき」との文面からは、寺側の推薦をうけてのことかともみられるが、寂室は住持に就任しようとはしなかった。

足利義詮公帖 寂室への官寺住持任命

公帖とは、五山をはじめとする官寺の住持を任命する命令書のこと。官寺は格上から五山、十刹、諸山とランク付けされる。寂室は、生涯に四度にわたって公帖を下されたが、一度も就任に応じることはなかった。永源寺文書には寂室が室町幕府二代將軍足利義詮から下された公帖が三通伝わっている。

【寂室への住持任命】

観応元年（一三五〇）	六一歳	相模国長勝寺	…諸山のうち
文和元年（一三五二）	六三歳	豊後国万寿寺	…十刹のうち
康安二年（一三六二）	七三歳	天龍寺	…五山のうち（第二位）
康治二年（一三六三）	七四歳	建長寺	…五山のうち（第一位）

二、六角氏頼との出会いと永源寺の開創

帰国後各地を遍歴していた寂室は、延文五年（一二六〇）、六角氏の本拠地観音寺城に程近い桑実寺において六角氏頼（一二三六～七〇）と出会います。時に寂室七十一歳、氏頼三十四歳のことでした。

寂室に帰依した氏頼は、寂室にとどまるべき地を献じようと奥島（近江八幡市島町）と雷溪（東近江市永源寺高野町）を候補に挙げ、寂室は雷溪の地を選んで永源寺を開きました。寺の名は、氏頼の法名崇永から「永」を、近江源氏の本流六角氏から「源」をとって名づけたといえます。愛知川上流の涼やかな流れに険しい山々が迫る雷溪の景観は、理想の幽邃の地としてまさに寂室の心に適うものでした。

鎌倉時代に日本に伝えられた禅は、やがて各地の守護や御家人たちまで広く受け入れられ、大陸への留学経験をもつ禅僧たちも多く守護の氏寺などの住持となりました。中峰明本を倣って独立不羈の禅をめざした寂室ですが、永源寺に留まり続けたことには、氏頼との交流の深さがうかがえます。

8 寂室録

一冊のうち

版本 縦二八・七cm 横一九・四cm
江戸時代

『寂室録』は寂室による詩文を収めたもの。

本資料は江戸時代に刊行され、巻末には永源寺の中興一絲文守による『江州永源寺開山山田応禪師行状』が付せられる。（展示ページは『江州永源寺開山山田応禪師行状』のうち）

康安元年正月一日、はじめて雷溪を訪れた寂室は「林溪幽邃頗愜野情」（林が間近までせまった溪谷の奥深く物静かなありさまは、たいへん快く野趣にとむ（『寂室録』））という景観を見て、ここに留まることを決めた。

9 寂室元光墨蹟 寺号「永源寺」

一幅

重要文化財 永源寺文書のうち
紙本墨書 縦三三・四cm 横八二・八cm
南北朝時代

寂室の筆になる永源寺の寺号。素直で伸びやかな筆致を見せる。ほかに山号「飯高山」「瑞石山」の掛幅も伝来する。

永源寺の名は、この雷溪の地を寂室に献じた六角氏頼の法諱「崇永」より「永」の字を、また六角氏が源氏の流れを引くことから「源」の字を取って名づけたと伝える。永源寺はその根本となる寺の名より、六角氏頼との深いかかわりを伝えているのである。

10 永源寺境致図

一卷

重要文化財
紙本墨書 縦三五・五cm 横七七・九cm
江戸時代

永源寺の境内とその周辺の様子を描く。巻首側（向かって右）が愛知川上流の東である。境内には現在の法堂にあたる「濟世法王殿」を中心に、その向かって右に寂室の墓所である「大寂塔」、寂室が亡くなった含空台にちなむ「含空院」などがある。また「濟世法王殿」あたりから川岸に下ると、応仁の乱を避けた横川景三らが訪れた、今はなき「錦藍亭」も見える。

これらの景観は、中興一絲文守の後を継いだ如雪文岩の頃、境内の復興が一段落した一七世紀半ばの永源寺の様子を描いたものと推測される。

11 寂室元光消息

一幅

重要文化財
紙本墨書 縦三〇・八cm 横八二・七cm
二月九日付

京都天龍寺の塔頭に名を残す華藏寺の黙翁妙誠にあてた消息。黙翁は夢窓疎石の弟子で、宮中などにも顔が広がった。

文中の「佐々木」は氏頼を指す。近頃耳にしたうわさ（具体的に何を指すかは不明）について、信用には足らないように思われるが、もし事実ならば驚きなので、真偽のほどを確かめ、諏訪殿と相談の上、なにこともなく落ち着いたならばありがたいと思うと述べている。

寂室から黙翁への手紙はほかにも知られる。寂室にとって黙翁は、色々相談を持ちかけたりもするような、信頼した相手だった。

三、寂室の遺徳を慕う人々

貞治六年（一二六七）九月一日、寂室元光は永源寺山内の含空台において七八歳の生涯をとじます。死に臨んで記した遺誠（弟子たちに遺し与える誠め）では、冒頭から「直しく須らく林下に迹を晦まし、火種刀耕して一生を終えんことを図るべきなり」と述べており、六角氏頼の庇護をありがたく受け、永源寺に住しながらも、林下としての在りようを心に刻んだ寂室の面目躍如たるところがあります。また永源寺のある熊原の地を氏頼に還し、建物は地元高野村の父老に与えるよう命じていますが、一方でそれが固辞されたならば、老成した僧を迎えて存続させてもよいとして、周囲から望まれて寺が続いてゆくことは否定しませんでした。

六角氏頼は、寂室の死の翌年とみられる書状（『近江愛知郡志』所収）で、寺内でよく相談して後継の住持を決め、末永く寺を存続させてゆくよつにと書き送り、永源寺の存続を願いました。寺では二世住持となった弥天永釈を中心に、寂室の高弟たちが永源寺の基礎を築いていきました。

12 寂室元光遺誠

一幅

紙本墨書 縦三五・五cm 横七七・九cm

貞治六年（一二六七）

遺誠は、弟子たちに遺し与える最後の誠め。自らを簡単に埋葬した後は、永源寺のある熊原の地を氏頼（太守）に還し、永源寺の建物は地元高野村に付与し、弟子たちは各々「林下」に散じ去れと述べている。

寂室にとって永源寺に住することは、あくまでも氏頼との個人的な関係に基づいた一時的なことにすぎず、決して「林下」としての在りようを枉げて権門の支援で生きることの意味しなかった。

だからこそ、寂室の死により二人の関係が消滅すれば、それに伴う諸々のしがらみを清算し、弟子たちには今までどおり林下としてのあり方を実践し続けるようにと述べているのである。

13 寂室元光遺偈

一幅

紙本墨書 縦三四・八cm 横七七・三cm

貞治六年（一二六七）

遺偈は高僧の辞世の偈（詩文）で、一生を総括し、人格を象徴するものとして重視された。

冒頭の二行は、背後に飯高山が迫り、目前に愛知川が流れる永源寺の様子を詠む。続く二行には『涅槃経』から、釈迦の死に間に合えなかった弟子迦葉に対して、釈迦が棺から両足を出し慈悲を見せたという故事（鶴林双趺、禅の祖達磨が、没後、埋葬の地である熊耳から片足の靴を持って故郷インドに戻り、もう片方の靴が熊耳に残されたという故事（熊耳隻履）に触れる。そして最後には、一切は空かもしれないが、空の華はやはり空の実を結ぶのだとして、すべてを幻と突き放しつつも、決して虚しいものとはしていない。

末期の震える手で書かれ、自らを「亡僧」とすることには、寂室の覚悟が見て取れる。九月一日はまさに寂室の亡くなった日であり、この遺偈を書いた後

に寂室は息を引き取ったと伝えている。

14 永源寺開山祭文 月心慶田筆

一幅
重要文化財

紙本墨書 縦二八・九cm 横五九・八cm

貞治六年(一二三六)九月二日

寂室の死の翌日、その死を悼んで作られた祭文。寂室の行いが潔く、博学であったこと、名利を断つて山林に隠れたことなどを述べ、その再来を願っている。

寂室と、月心慶田の師である月翁元規は、約翁徳俊に共に参じた仲であった。月心は大陸に学んだ後、美濃定林寺、建長寺、建仁寺、南禅寺などを歴住しており、寂室とも親交があった。

15 弥天永釈開山塔頭燈油田寄進状

一通
重要文化財 永源寺文書のうち

永和四年(一二三七八)二月二十八日付け

弥天永釈(一四〇六)は寂室の高弟で、永源寺第二世住持となった。本状は、寂室が亡くなって一年を経た永和四年に、寂室の塔頭に対して田地二か所の得分を、燈火の財源の名目で寄進したものである。

なお、この前年には、寂室の墓所をまもる塔頭として、一溪純によって考槃庵が創建されている。また本状とほぼ時を同じくして、やはり寂室の高弟である霊仲禅英からも考槃庵への寄進があり、翌年の寂室一三回忌を目処として、整備が進む様子がうかがえる。

16 霊仲禅英永源開山和尚御影長燈料目寄進状

一通
重要文化財 永源寺文書のうち

永和四年(一二三七八)二月二十九日付け

永源寺開山寂室の卵塔(墓)の前にもず燈火の財源として、四ヶ所の得分を寄進する。宛先の考槃庵主とは、前年に寂室の墓所をまもるため考槃庵を開

創した一溪純である。

霊仲禅英(一二三〇)一四一〇)は寂室の高弟で、のちに永源寺第四世となつている。

17 永源寺開山一三回忌法語 月心慶田筆

二幅
重要文化財

紙本墨書 第一幅 縦五四・〇cm 横七七・四cm(右)

第二幅 縦五四・〇cm 横七七・七cm(左)

康暦元年(一二三九九)

康暦元年九月一日に行われた寂室の一三回忌の法語。第一幅目の二行目に「真像点眼安座」、五行目に「円心禪師(即寂室)即今再来了」とあるとおり、一三回忌では塑像寂室元光像(現存、重要文化財)の開眼供養が併せて行われた。

寂室の死の翌日に、寂室の再来を願う祭文を記した月心慶田の筆になる。整然と記された祭文に対し、この法語のやや傾き歪んだ書体からは、一〇余年の年月が感じられる。

18 塑像寂室元光像納入品

一括
重要文化財

康安元年(一二三九九)の寂室の一三回忌で開眼供養された、塑像寂室元光像に納められていた。

銅製経筒のほか、法華経や華嚴経、般若心経、阿弥陀経などの経典や陀羅尼を書写して一巻としたもの、印仏や名号などからなる。経典中には弥天永釈や霊仲禅英、永果、行岩、聖岳、曇謙、永哲、徳林、昌寛、禅悦、崇高、永顔、曇猷、思賢、元猷、曇竹といった弟子の名がみえ、残された年記は康安五年(一二三九)から同七年(一二四一)に及ぶ。これらの年記から推測をめぐらせば、寂室の没後五年経った頃には、すでに寂室像の造像にむけての動きがあったかともみられる。

重要文化財 永源寺文書のうち

明徳四年（一三九二）二月一日付
 主だった寂室の弟子九人が連署するこの制法（掟書）は、道をわきまえた僧を住持とすること、だからだと寺に滞在し続けず幻住遍歴を旨とすること、寺内には仏典以外をおかず、世俗の典籍を見ることは許さないことを衆議によって決定したと記し、これを守らないものは寂室の徒弟ではないと強い調子で述べている。

將軍の祈願所となり寺領も安堵され、社会的経済的基盤がほぼ確立した状況下にあっても、寺の存続はあくまでも寂室が遺誡のとおり、林下幻住の僧たちの修行の場としてなのだ、という弟子達の思いが改めて確認されている。

“寂室の滞在所 から、永続的な寺へ”

当初の永源寺はあくまでも“寂室の寺”であった。寂室の生前、永源寺を訪れた者の多くが寂室目当てであり、また初期における寺領寄進の多くが、寂室への帰依や師弟関係などに基づいたことから、これは認められる。

しかし、現存する文書を見る限り、これはやがて一般的な寄進や買得へと明らかに変化してゆく。その時期や状況は、あたかも寂室の十三回忌を経て、寂室の存在が次第に抽象的な意味で“開山”に昇華されてゆく過程に合致するようである。

そしてこれはまた、永源寺が“六角氏頼の招請により寂室が滞在する一時的かつ私的な庵”から、“寂室を開山とし、経済的基盤を有し、公的にも存在が認められた、永続を前提とした法人的存在としての寺”に性格を変貌させてゆく過程でもあった。

寂室の没した永源寺山内の含空院には、没後十年にして考槃庵（寂室の塔所）のち將軍足利義持の命名によって含空院となる。独自の寺領を持ち、山上六ヶ寺のひとつ）が開創され、十三回忌には塑造寂室像の開眼に至る。

また永徳三年（一三八三）には、室町幕府三代將軍足利義満によって永源寺が祈願所となされ、寺領も安堵をうけた。永源寺はこの時までにかなりまとまった寺領を形成していたが、義満の祈願所化と寺領安堵は、いわばその永源寺の存在と寺領に対して、公の承認を与えたことになろう。そしてこれ以後、押領排除、守護不入、諸役免除といった、室町幕府による永源寺とその寺領の保護政策が始まる。

【図1】永源寺文書に見る初期の寺領

番号	和暦	西暦	内容	文書の差出人ほか	文面に記された目的や理由など	欄外備考
(1)	康安2	1362	寄進	赤木(六角氏領)	為衆僧御時料分	欄外備考 234-9
(2)	貞治5	1366	寄進	譽境(富塚譽境) ※氏領の荘割あり	寂室和尚依有師實之儀/為塔頭料足所	222-12
(3)	貞治5	1366	寄進	譽心	寂室和尚依師實之儀/倉空台料所	222-1
(4)	貞治5	1366	寄進	富塚譽境	(※(2)に關わるもの)	234-25
(5)	貞治6	1367	寄進	富塚譽境	為永源寺塔頭料所 (※(2)(4)に關わるもの)	234-26
(6)	貞治6	1367	寂室元光、倉空台にて没す			
(7)	応安6	1373	寄進	(次失して不明)	為円応禪師寂室大和尚塔頭之料足	中世58
(8)	応安6	1373	(寄進)	聖倫	開山塔頭為御計可有管領事	222-7
(9)	永和3	1377	寄進	沙弥了道(→「江州飯高永源寺方丈」宛)	因為開山寂室和尚御弟子、於没後入位陣於同家、為領結縁之御願經所	234-53
(10)	永和3	1377	寄進	円印(→前公専主)	永源寺塔頭料足/開山円応禪師依為師匠	222-2
(11)	永和3	1377	一深純により、開山寂室の塔頭として考案庵が開設される(諸石歴代雜記)			
(12)	永和4	1378	寄進	弥天水釈(寂室高弟、永源寺2世)	為永源寺開山塔頭燈油料	234-54
(13)	永和4	1378	寄進	豊仲傳英(寂室高弟、永源寺4世) (→「考案庵主(親老庵主)禪師」宛)	永源寺開山和尚塔頭前長燈料足	234-55
(14)	永和4	1378	寄進	豊仲傳英(寂室高弟、永源寺4世) (→「考案庵主禪師」宛)	永源寺開山和尚塔頭前長燈料足	234-56
(15)	康應元	1379	荒蕪	熊原口ニ口	永源寺の燈明田ニ	中世11
(16)	康應元	1379	寂室13回忌	聖像寂室像が御眼される(永源寺開山十三回忌法要)		
(17)	永徳2	1382	寄進	妙乗	為二親并藤珍大徳口乗菩提、於永源寺開山和尚塔頭	中世13
(18)	永徳3	1383	寄進	室町幕府3代將軍足利義滿が、永源寺を祈願所となす(室町將軍家御教書)		232-7
(19)	永徳3	1383	寄進	室町幕府3代將軍足利義滿が、永源寺領を列記して安堵(室利義滿御教書)		
(20)	永徳3	1383	荒蕪	実弘	(近江国栗智郡他庄内名田、栗本前田上中庄下司公文職、牧庄内在家、田上牧中庄内名田、小牧庄下下司勘定請使所、基弘平次名敷在田地、利徳得御二部名等田中寺引当職名田、神越郡栗見本庄小社領内所々、新御國中郡名田、龍生郡安古郡内田地、日野牧上保内流尻田地并買得取在名田等、藤原河内別府下方地頭頼朝所分内田地)	232-8
(21)	至徳3	1386	寄進	宗資	為永源寺開山御塔頭七月忌料足	中世14
(22)	明德4	1393	寂室の弟子たちにより、永源寺の住持等について定められる(永源寺住持僧衆并重教等判法要)	香口大師為菩提料、永源寺開山和尚塔頭	中世15	
(23)	明德5	1394	大角藻高書下(→当寺住持)…臨時課役免除	(所被寄附当寺也)	246-2	
(24)	応永元	1394	寄進	近衛良綱		234-10
(25)	応永元	1394	室町將軍家御教書(新庇義符→六角藻高)…所領安堵		232-13	
(27)	応永2	1395	足利義滿御教書…(24)をうけて安堵		232-14	
(28)	応永2	1395	室町將軍家御教書(新庇義符→六角藻高)…(24)をうけて安堵		232-9	
(29)	応永4	1397	寄進	基師寺住持守光兼	(為菩提)	232-15
(30)	応永4	1401	室町將軍家御教書(島山基國→六角藻高)…押領排除		234-22	
(31)	応永13	1406	室町將軍家御教書(新庇義符→六角藻高)…押領排除		232-19	
(32)	応永16	1409	荒蕪	高野馬四郎	(依有直要用)	232-16
(33)	応永17	1410	足利義持御教書…(19)をうけて、重ねて寺領を安堵		中世21	
(34)	応永18	1411	荒蕪	清重	(依有直要用)	232-10
(35)	応永19	1412	室町將軍家御教書(細川藻元→当寺住持)…諸役免除		中世23	
					232-17	

四、六角氏の支援と永源寺の発展

20 六角崇永寺領寄進状

一通

重要文化財 永源寺文書のうち
康安二年（一三六二）九月二日付
崇永は六角氏頼の法名。永源寺は氏頼が寂室に雷溪の地を寄進したことにより開創されているが、本状は永源寺への寺領寄進状として最も古い。また本状で寄進されている熊原村は、まさに永源寺のある辺りである。

のち寂室は自らの遺誡（弟子らに与える遺言）の中で、熊原の地は太守（氏頼）に返すようおべているが、それこそまさに本状にある熊原村にあたるだろう。

21 近衛良嗣寺領寄進状

一通

重要文化財 永源寺文書のうち
応永元年（一三九四）二月二十九日付

「近衛大納言」の意をうけ、柿御園内熊原村を永源寺に寄進するとの内容。「近衛大納言」とは当時一二歳であった近衛良嗣（一三八二〜一四五四）で、良嗣はのち応永一五年には関白となっている。

柿御園は近衛家が代々伝えてきた荘園のひとつ。熊原村は既に近江守護六角氏頼により康安二年（一三六二）に永源寺に寄進されているが、本状によって荘園領主からも寄進をうけたことになる。守護と荘園領主双方の承認を受けて、熊原村は永源寺領としていつそうゆるぎないものとなった。

22 足利義満御判御教書

一通

重要文化財 永源寺文書のうち
応永二年（一三九五）三月五日付

前年の近衛良嗣による柿御園内熊原村の寄進をうけ、室町幕府三代將軍足利義満が、熊原村を永源寺の所領として認めている。

23 室町將軍家御教書

一通

重要文化財 永源寺文書のうち
応永二年（一三九五）五月三日付
管領斯波義將（左衛門佐）から近江守護六角満高（佐々木備中守）に宛てた管領施行状。同年五月三日付けで出された將軍足利義満の御判御教書をうけて、きちんと熊原村が永源寺に領掌されるよう守護に伝達している。

24 六角満高書下

一通

重要文化財 永源寺文書のうち
明徳五年（一三九四）七月四日付
六角満高（一三六九〜一四一六）は、永源寺の開創に尽力した六角氏頼の息子で、氏頼の亡くなる前年に生まれている。後世、満高の誕生は永源寺の本尊観世音菩薩の利益によるものだとする話が広く人口に膾炙した。

本状は、近江国内の永源寺領について、臨時課役を免除することを伝える。当時、満高は近江守護の立場にあった。

25 富塚曇瓊田上中庄下司・公文職等寄進状

一通

重要文化財 永源寺文書のうち
貞治五年（一三六六）六月五日付
富塚曇瓊が代々伝えてきた田上中庄の下司・公文の両職と、田上牧庄内の在家一〇箇所を、寂室との「師資の儀」（子弟関係）に基づき塔頭経營の財源として寄進する。田上中庄、牧庄はいずれも現在の天津市域にあたる。

末尾に、後々の証明のためとして花押が据えられるが、これは六角氏頼によるもので、近江守護として寄進状の有効性を保障している。寂室への帰依の広がりとともに、これらの寄進の背景に氏頼の後見が大きく寄与していたことがうかがえる。

重要文化財 永源寺文書のうち

貞治五年（一二三六）一月一日付

先に寄進した田上中庄の下司公文職に関わる得分や田上牧庄内在家一〇所の内訳を具体的に示し、さらに加えて田上中庄内の田四段、田上牧庄内の在家四か所を寄進する。

富塚曇瓊は、翌貞治六年にも田上中庄と同牧庄内の名田を寄進しており、初期における永源寺の支援者のひとりであった。

裏面に据えられた花押は裏打ち等のためはつきりと見て取ることはできないが、やはり六角氏頼のものである可能性がある。

永源寺文書にみる、文書の移り変わり

(1) 室町將軍権力の安定と、近江守護としての六角氏

…「御判御教書」と「室町將軍家御教書」

永徳三年（一二八三）の室町幕府三代將軍足利義満による祈願所化と寺領安堵を契機に、室町幕府による永源寺に対する保護政策が始まった。内容は、永源寺関連寺院や所領への押領排除、守護不入、諸役免除などである。

この時期、幕府の命令は、將軍自らが花押を据えた「御判御教書」、將軍の意向を管領が伝達する「室町將軍家御教書（管領奉書）」によって、寺自体や、寺の所在地の守護を宛先として伝えられた。初出はいずれも永徳三年、先述の義満の祈願所化と寺領安堵に関わるものである。

守護である六角氏は、これら幕府からの指令をうけとり、実行させる役割を担った。永源寺文書中には、六角氏が幕府の指令をさらに在地の配下に伝えるために出した遵行状も見られる。

(2) 第二次六角征伐とその後の混乱から、

戦国大名六角氏の覇権確立まで

…「室町幕府奉行人連署奉書」

室町幕府からの指示は、やがて室町幕府の実務担当者である奉行人が連名で命令を下達する「室町幕府奉行人連署奉書」の形で出されるようになる。(1) から (2) への変化は、將軍親政や管領による幕政運営から徐々に奉行人体制に変化する、室町幕府の政治構造の変化を反映したものである。永源寺文書中の初見は、応仁二年（一四六八）含空院領伊勢国守忠名に対し押領停止を命じるものである。

しかし永源寺文書について言えば、むしろ明らかな画期となっているのは、やはり延徳三年（一四九二）にはじまる一〇代將軍足利義材の第二次六角氏討伐である。同年八月の將軍の近江出陣と近江国の「御料国」（將軍直轄国）化以来、「室町幕府奉行人連署奉書」が立て続けに出されている。そして細川政元のクーデターにより義材が失脚した後も、替わって任じられた近江守護山内就綱が六角高頼に追い落とされるまで、「室町幕府奉行人連署奉書」が出され続けた。

(3) 六角氏の戦国大名化と領国支配権の確立

…「六角氏奉行人連署奉書」

明応五年（一四九六）に含空院雜掌に対して出された「室町幕府奉行人連署奉書」を最後に、室町幕府からの文書は見られなくなる。かわってあらわれるのが「六角氏奉行人連署奉書」に代表される六角氏の発給する文書で、「六角氏奉行人連署奉書」の初見は明応四年である。

六角氏は、明応三年（一四九四）には山内就綱と延暦寺衆徒の連合軍を打ち破り、第二次六角討伐以来の混乱を乗り切って、実質的に近江における領国支配権を確立した。以後六角氏の滅亡する永禄年間まで、「六角氏奉行人連署奉書」は発給され続ける。

五、戦乱の世と永源寺

応仁元年（一四六七）、將軍家や有力守護家の跡継ぎや勢力争いから、細川勝元を中心とする東軍、山名宗全を中心とする西軍に分かれ、都を二分する争いが起こりました。文明九年（一四七七）まで続く応仁の乱の幕開けです。

六角氏は、近江北部に勢力を持った京極氏が東軍に属したのに対抗して西軍に属しました。このとき六角氏の当主は、いまだ幼少の龜寿丸（のちの高頼）でしたが、一族の山内政綱を中心とし、伊庭貞隆ら國人たちが協力してこれを支え、乱を戦い抜きました。

幸いにもこのときの戦火は永源寺まで及ばず、永源寺には都から横川景三や景徐周麟ら名だたる文化人たちが、戦乱を避けて来訪しています。

27 小倉実澄像

紙本蠟画 縦六五・六cm 横二六・七cm

天明元年（一七八一）

一幅

小倉実澄（一四三九〜一五〇五）は、蒲生郡佐久良城に本拠を置き、応仁の乱当時には永源寺周辺を含めた湖東の地に確固たる勢力を築いていた。六角氏と対抗した京極持清の配下にあつたが、文武両道にすぐれ、永源寺にとつての大檀越であつた。応仁の乱の戦火をさげ、多くの文化人たちが永源寺を訪れた背景にも、実澄の存在が大きかつたといえる。

本画像は、実澄の生前に描かれ横川景三（一四二九〜九三三）が着賛した画像を、江戸時代に写したものの。鬚をたくわえ、道服を着、如意を執る姿を描く。下方には江戸時代半ばに大坂で活躍した文化人木村兼葭堂の識語がある。

28 瑞石山事跡

重要文化財 永源寺文書のうち

紙本墨書 縦二六・四cm

一卷

応仁の乱と、その後の永源寺に関わる資料を一巻にまとめる。巻頭の「黄川

東遊書之内瑞草之事跡」は、横川景三（一四二九〜九三三）の『小補東遊集』『小補東遊続集』などから抜粋編集されたとみられる。

横川景三は、五山文学を代表する僧で、応仁元年（一四六七）、近江国愛智郡市村を故郷とする友人の桃源瑞仙の手引きにより市村に戦乱を避けた。同年一〇月一日、横川、桃源に景徐周麟（一四四〇〜一五二八）を加えた三人は、小倉実澄の案内で永源寺を訪れ、もみじの美しい錦藍亭に入り、含空院で開山塔を拝し、同じ飯高山内にあつた曹源寺、永安寺などを巡っている。

29 足利義政御判教書

一通

重要文化財 永源寺文書のうち
紙本墨書 縦三二・六cm 横三一・六cm
文明一〇年（一四七八）一月二日付

六角高頼が応仁の乱で西軍に属したことに乗じ、永源寺含空院領伊勢国久米守忠名において日野家雑掌が違乱を働いていたことについて、守忠名および近江国内に散在する含空院領を返付する旨の御教書である。文明九年に応仁の乱が一段落し、寺領からの収入が回復されてゆく様子が知られる。

寂室の墓所をまもって創建された考槃庵はのちに將軍足利義持によつて含空院と名づけられた。含空院は、永源寺とは別に独自の寺領を持っていた。伊勢国久米守忠名は含空院の重要な寺領のひとつ。

30 含空院昭堂上喜奉加錢納下行帳

一通

重要文化財 永源寺文書のうち
文明一四年（一四八二）三月

応仁の乱終了後、一段落した文明一四年三月ころ、派下各寺から奉加を得て、含空院昭堂（開山寂室を奉安する堂）の屋根の上葺きが行われた。本史料は、上葺きに関わる費用の出入りを記したものだ。が、残念ながら支出を記した後半部分は失われている。

永安寺、曹源寺、興源寺、退蔵寺は、それぞれ永源寺の四派の本寺で、費用分担の中でも大きな部分を担っている。

応仁の乱期の伽藍の様子はよくわかっていないが、乱後の永源寺は、寺観の整備に乗り出してゆく。

31 重修大歇橋供養香語 桂林徳昌筆

一幅

重要文化財 永源寺文書のうち
紙本墨書 縦三九・〇cm 横八六・八cm

永源寺境内の西北に、飯高山から愛知川に流れ込む小川がある。この川に架けられた橋が大歇橋で、ここから永源寺境内となる。

桂林徳昌は永源寺一九世。香語には、往來の要衝として以前から板橋が架けられていたこと、橋のたもとにあった大歇亭から大歇橋と呼ばれたこと、柏舟宗趙（一四一六〜九五）の尽力で橋が新しく架け替えられたことなどが記される。

柏舟は応仁の乱後の寺の興隆を支えた僧で、前年には奈良興福寺の僧周嚴から仏像等の寄進をうけ、同年には方丈庫司も再造された。

六角氏は、延暦寺などの寺社や公家らの領地をいわば横取りし、恩賞として国人たちに分け与えることで結束力を強め、戦乱の世を乗り切ろうとしました。しかしこれは決して寺社や公家 幕府にとって受け入れられることではなく、室町幕府は長享元年（一四八七）、延徳三年（一四九一）の二度にわたり六角氏を討つことを決め、將軍自ら近江に出陣しました。六角氏はこれをよくしのぎ、戦国大名へと成長してゆきます。

九代將軍足利義尚による第一次六角討伐では鈎（現在の栗東市）に陣が置かれ、湖南から甲賀が戦乱の場となりましたが、十代將軍義材による第二次六角征伐では、六角氏が甲賀に跡をくらし、その空白をついた幕府軍が湖東に入ったことにより、湖東方面、愛知川流域が戦場となりました。

愛知川上流の永源寺は、八風峠を越えて伊勢に抜ける八風街道沿いの要衝でもあり、明応元年（一四九二）、飯高山近くまで六角氏を追ってきた幕府軍によ

り、ついに永源寺は兵火にかかり悉く堂塔を失いました。

32 錦藍亭額

一面

長享二年（一四八八）十一月
縦三一・二cm 横五一・四cm

錦藍亭は現存しないが、「永源寺境致凶」には、濟世法王殿（法堂）のある境内中心部から、愛知川にむけ切り立った斜面を降ったあたりに描かれる。応仁元年（一四六七）一〇月一日、小倉実澄の案内で永源寺を訪れた横川景三、景徐周麟、桃源瑞仙は、まず錦藍亭に入った。旧暦一〇月は現在の十一月月上旬にあたり、紅葉の盛りでもある。錦藍亭の光景の見事さに感激した横川らは、小倉実澄も交えた四人でこの場所を題材に詩を読み競ったのだった『小補東遊集』。

本額の裏面には「長享戊申霜月日作□」とあり、横川たちが見たものとは異なるが、この長享二年はまさに將軍足利義尚による第一次六角征伐（鈎の陣）の最中である。この戦で永源寺が直接的な被害を受けることはなかったが、この時期の資料は永源寺にはほとんど残っておらず、貴重な存在といえよう。

33 永源寺雜掌清牧請文

一通

重要文化財 永源寺文書のうち
延徳三年（一四九一）七月一日付

永源寺が第二次六角征伐に先立ち幕府に提出した請文で、近江国内の主だった永源寺の知行所を列記する。これらはおおむね従来から足利義満や義持など歴代の將軍から安堵をうけてきたもので、永源寺の主だった寺領を示すとみてよい。この請文をうけて、のちに將軍足利義材から安堵をうけている。

義材の近江出陣は八月のことだが、義材が着々と準備をすすめ、永源寺も幕府に協力する姿勢を示していたことがうかがえる。

34 足利義材御判御教書

一通

重要文化財 永源寺文書のうち

延徳三年（一四九二）八月六日付

七月一六日付けで提出された請文をふまえ、永源寺領を安堵する。同年八月二日には第二次六角征伐のため將軍義材が近江に出陣しており、それに先立って出されたものである。

請文と比べると「播磨国河内別符下方地頭職闕所分内田地」が加わり、諸末寺等が記されないなど若干の異同があるが、諸末寺や念仏院の所領に関しては、別に同日付けの御判御教書が発行され、やはり安堵をうけている。

35 室町幕府奉行人連署奉書

一通

重要文化財 永源寺文書のうち

延徳三年（一四九二）一〇月九日付

永源寺および諸末寺の寺領を守護、本所使者不入の地となす旨を伝える。宛先の安富元家（筑後守）は管領細川政元の被官で、六角氏を討伐するため湖東方面に派遣されていた。

安富元家が近江に派遣されたのは、第二次六角征伐の前年に細川政元が近江守護に任じられたためだが、將軍出陣後の延徳三年八月三〇日には近江一国を「御料国」（將軍直轄領）とし、安富元家をその「守護代分」となす命が下され、以後近江国内の六角氏掃討戦は、事実上安富元家を総司令官とする形で実施された。

36 安富元家遵行状

一通

重要文化財 永源寺文書のうち

延徳三年（一四九二）一二月二九日付

遵行状は、幕府の命をうけ、守護などが在地の配下に伝えるために発給する文書。宛先の高橋三郎右衛門尉は、安富元家の被官人で当時郡代の役割を担った。

37 飯尾行房書状

一通

重要文化財 永源寺文書のうち

一二月九日付

延徳三年（一四九二）九月ごろまでに近江をほぼ制圧した足利義材は、翌明応元年（一四九三）九月、寺社本所領の御料所化（將軍直轄領化）を決定した。永源寺に対しても田上をのぞく近江国内の所領をすべて御料所とすることが通達され、ここに永源寺は戦火で焼失した堂塔のみならず、寺領の大半までも失うという危機に直面した。

しかしこれらの所領はまもなく返還されたようで、本状は永源寺に対し、將軍家祈願所である縁により所領を返還するから、土地の目録を提出するように求める内容となっている。

38 室町幕府奉行人連署奉書

一通

重要文化財 永源寺文書のうち

明応三年（一四九四）一二月五日付

田上牧庄内芝原について、佐々木小三郎（山内就綱）が兵糧と称して押領しているのはいわれないことだから、もどおり永源寺に領知させなさいとの内容。宛先の檜葉氏は室町幕府奉公衆で地頭職にあった。

明応元年（一四九二）一月、六角氏をおおむね平定したとみた義材は、六角高頼に対抗する六角政堯の猶子虎千代を近江守護に補任し、一二月には京都に凱旋した。しかし明応二年、河内に出陣中の義材は細川政元のクーデターにより將軍の地位を追われ、政元が幕府の実権を握った。その一〇月には六角虎千代にかわり、山内就綱が近江守護に補任されたのである。

明応三年一〇月に近江に入った就綱は、延暦寺衆徒らの応援もあって、一旦は六角高頼の金剛寺城を攻め落とした。しかし一一月に入ると美濃の守護代斎藤利国の来援を得た高頼が反撃し、一二月半ばまでには勝利をおさめた。これにより幕府もついに六角高頼討伐を断念。明応四年（一四九五）末までに高頼を赦免し、近江守護に還補した。本史料にある明応三年一二月五日は、まさにこの騒乱のさなかであり、本史料の内容も一連の流れの中にとらえられる。

39 柏舟宗趙遺偈

一幅

重要文化財 永源寺文書のうち
紙本墨書 縦二八・〇cm 横四一・七cm

柏舟宗趙は、六八歳になる文明一五年（一四八三）以来、亡くなるまで永源寺住持をつとめた。小倉実澄とも親交が深く、実澄は主である京極持清の没後、柏舟のもとで剃髪している。

文明一十九年（一四八七）の大歌橋の架け替え、方丈と庫司の再建など、寺観の整備に尽力したが、その矢先の明応元年（一四九二）、第二次六角氏征伐の戦火をうけて伽藍は悉く焼失した。その復興もままならぬ中での死去であった。命取りとなった下痢にかこつけて、自らの末期を「糞丈六仏」と総括したが、それをどうしようもないものの山とみるか、それでも丈六の仏であると評価するのか、「是又空華、結空子」と詠んだ寂室と通じる点もありながらも、印象は異なる。

40 惟天正球像 鉄叟景秀賛

一幅

絹本着色 縦八七・三cm 横三八・七cm
元龜元年（一五七三）賛

惟天正球は永源寺四一世住持。永正一五年（一五一八）に入寺している。永禄九年（一五七三）に百濟寺で没しているが、やはり明応の回祿後の永源寺を支えた僧の一人といえる。賛は詢甫宗泉像と同じ鉄叟景秀の手になり、元龜四年（一五七三）に記されているが同年は惟天没後七年にあたる。

41 詢甫宗泉像 鉄叟景秀賛

一幅

絹本着色 縦八七・一cm 横三八・五cm
室町時代

詢甫宗泉は永源寺三三世住持。永源寺に入る以前は曹源寺にあり、明応六年（一四九七）に入寺。天文年間（一五三二〜五五）頃まで永源寺に関わり、明応の回祿後の永源寺を支えた僧の一人である。

屈輪文の曲ロクに向かって右向きに座し、膝上に定印を結ぶ。眉は黒く、頭髪や鬚は描き表さないが、皺のある初老の相に描かれる。

賛文を記した鉄叟景秀（一四九六〜一五八〇）は寂室の弟子靈仲禅英の流れを引き、建仁寺や南禅寺の住持を歴任した人物で、天正七年（一五七九）に織田信長が浄土宗と日蓮宗に法論を戦わせた安土宗論では判者をつとめた。

42 六角定頼書下

一通

重要文化財 永源寺文書のうち
永正一三年（一五一六）九月二六日付

六角定頼は、室町幕府の二度にわたる六角氏征伐をしのいだ高頼の息子。栗太郡田上牧庄内の永源寺領について、近年では永源寺の支配が及ばないようになっているようだが、永源寺溪橋廊下の修理工として、重ねて寄進する旨を伝える。

これに先立つ明応元年（一四九二）には、永源寺は室町幕府の第二次六角征伐の戦火により伽藍を失っている。その後六角氏は家臣団に対し永源寺の再興への協力を命じているが、六角氏自身も室町時代を通じて永源寺の庇護者であり続けた。

43 六角氏綱書下

一通

重要文化財 永源寺文書のうち
永正一三年（一五一六）九月二六日付

栗太郡田上牧庄内の永源寺領を、永源寺溪橋廊下の修理工として重ねて寄進する旨を伝えるもので、同日付け同内容の定頼の書下とともに伝来する。

六角氏綱は、室町幕府の二度にわたる六角氏征伐をしのいだ高頼の息子だが、永正一五年には父高頼に先立って没した。定頼はその弟で、早くから高頼、氏綱父子を支えていた。氏綱没後は定綱が家督を継ぎ、六角氏は一時は將軍足利義晴を迎えるなど京都の政局にも大きな影響を及ぼす存在となっていた。

44 後奈良天皇綸旨

一通

重要文化財 永源寺文書のうち
享祿元年（一五二八）一月二日付
第二次六角氏征伐に伴う明応元年（一四九二）の回祿（焼亡）以来、永源寺復興の助けとするため、永源寺の寺格を定める綸旨が二度にわたり出された。明応四年に円覚寺（鎌倉五山の第二位）の上とする綸旨（黄衣の勅許）が出されたのに続き、このたびはさらに天龍寺（京都五山の第二位）に准じる（紫衣の勅許）内容となっている。
この背景には当時京都で力を持った細川高国のとりなしがあったが、細川高国は永正年間（一五〇四～二一）に六角高頼が専横を振るった配下の伊庭氏と対立した際にも高頼を支援している。

45 六角氏奉行人連署奉書

一通

重要文化財 永源寺文書のうち
天文二三年（一五五四）四月三日付
永源寺内の僧に咎があったときの処置について定める。
個人の罪はあくまで個人の責任に帰し、役職として行った罪はあくまでもその役職としての立場に帰すことで、師匠や弟子、同僚などに連帯責任はおおわせないとの考えが明確に打ち出されている。

裏面に宮木賢祐、種村貞遠の二名の六角氏奉行人の花押が据えられており、六角氏から申し渡す形がとられている。六角氏が配下の国人たちと定めた『六角氏式目』では基本的に寺院の自治を認める立場をとっており、本状のように六角氏が寺院内部まで立ち入って物事を定めるのは、それを鑑みればやや異例といえる。

46 霊仲禅英墨蹟 宝鉢記

一幅

重要文化財 永源寺文書のうち
紙本墨書 縦二一・一 cm 横四三・五 cm
応永二一年（一四〇四）

霊仲禅英の弟子蘭窓元香は、霊仲の命により大蔵経請来のため大陸に渡り、帰国に際して明の二世恵帝より黄金の鉢を賜った。この鉢は、蘭窓が帰国の後、永源寺に納められた。本資料は、霊仲によってそのいきさつが記されたもの。
この「宝鉢記」の存在は、重要文化財永源寺文書に含まれる天文二三年（一五五四）五月一六日付けの「永源寺文書目録」にも記されるが、ここに鉢は壬子の乱（明応の回祿）で失われたと注記されている。

47 六角承禎書状

一通

重要文化財 永源寺文書のうち
八月一三日付
承禎は六角義賢（一五二一～九八）の法名。弘治三年（一五五七）に義弼（義治）に家督を譲ったが、永祿二一年（一五六八）に織田信長に敗れるまで影響力を持ち続けた。
本状は、出陣のための祈禱を行い、また柿一籠を送った永源寺に対して、お礼を述べる内容。年次は記されないが、永祿四年（一五六一）三好長慶との戦いに際してのものだと推測される。

永祿六年（一五六三）、六角義弼（義治）は、重臣として権勢を誇った後藤賢豊父子を観音寺城内で謀殺しました（観音寺騒動）。ところがこれは後藤一族のみならず平井、進藤、池田など歴代の重臣たちの反発を招き、あまつさえ湖北から南進を企んでいた浅井氏らと結んで六角氏に敵対するという事態まで引き起こしました。六角義弼は、蒲生定秀を頼って日野城に入りましたが、この余波は各地におよんで政情不安を巻き起こしました。

永源寺の周辺は、小倉実澄以来小倉氏一族の力の及ぶところでしたが、実澄の没後は複数の家が分立し、互いの関係は必ずしも良好ではありませんでした。反六角氏勢力が日野城を攻めると、これに乗じて小倉右近大夫が永源寺に火を放ち、以後永祿七年五月まで四度にわたる小倉右近大夫の兵火により、永源寺はほぼ全山の堂舎を失いました。

そして永禄十一年（一五六八）、織田信長の近江侵攻によって六角氏は観音寺城を追われ、ついに永源寺は庇護者であった六角氏をも失うのです。

48 瑞石歴代雜記

二冊のうち

重要文化財 永源寺文書のうち
弘化四年（一八四七）
永源寺の開山寂室元光の生まれた正応三年（一二九〇）から、一絲文守にはじまる中興が一段落した寛文元年（一六六一）の開祖三〇〇年遠忌までの永源寺の歴史を編年体でしるす。

永禄六年（一五六三）から翌七年にかけて、小倉右近大夫が永源寺に火をかけた。永禄六年一〇月一日には「山上寺家中」、同二五日には「永安寺谷中」、翌永禄七年三月には大歌橋より手前の永安寺、興源寺、退蔵寺、五月二三日には橋より奥の永源寺、含空院、曹源寺が火にかかり、これにより「山上六ヶ寺」と称された六寺は悉く焼亡。「残る者は蕃場谷識廬谷第一寺のみ」という有様であった。

49 六角義弼書状

一通

重要文化財 永源寺文書のうち

七月九日付

永源寺の復興を命じる。このたびの「忽劇」（永禄六年（一五六三）から七年にかけての小倉右近大夫の放火）で伽藍や諸庵が焼失したが、退転あつてはならないと申し付ける。山上の伽藍がほとんど焼失し尽くした永禄七年のものと推測されている。

この永禄の回禄ののち、六角氏からは数度にわたって復興を命じられているが、永源寺の復興は叶わぬまま、のちに義治と名乗った義弼は、永禄一二年（一五六八）に織田信長の近江侵攻に伴って観音寺城を追われている。

50 六角義治書状

一通

重要文化財 永源寺文書のうち

九月三日付

先年の伽藍塔頭の炎上（小倉右近大夫の放火）以来、なかなか再興まで手が回らない状態かもしれないが、永源寺がそのまま衰退してしまわないよう力を合せ、また寺領等についても今後もしもいささかも相違あるべからず、修造にはげむことが肝要と述べている。
年次は記されないが、『瑞石歴代雜記』は永禄一二年の項に本状を収録している。

51 六角氏奉行人連署書写

一通

重要文化財 永源寺文書のうち

永禄一二年（一五六九）九月三日付

忽劇（小倉右近大夫の放火による焼亡）について大変だときいているが、寺領はいままでどおり年貢をおさめるように、納めない者について注進があれば成敗するという内容。写しではあるが、永源寺文書中で六角氏の存在を示す最後の資料である。

六角氏は永禄一二年（一五六八）九月、織田信長に観音寺城を追われ甲賀郡に逃亡した。永源寺には、永禄一二年九月の段階で早速に信長から禁制が下されている。しかし六角氏は観音寺城退去の後も、しばらくは反信長勢力の一端として存在感を示した。そして最後まで永源寺の庇護者としての立場を崩さなかったのである。

六、六角氏亡き後の永源寺

明応元年（一四九二）、永禄六年（一五六四）、同七年と数度にわたる戦火をうけ、被害も癒えぬ永禄十一年（一五六八）には織田信長の近江侵攻によって六角氏を失った永源寺は、しばらく苦難の時を迎えます。

この時期の永源寺を支えたのは、梅隱道雪、定林道静、松雲秀庵、文湖慧弘ら歴代住持の努力はもちろんのこと、永源寺の什物を収奪から隠し守った地元高野村の土豪九里氏らの協力にも大きなものがありました。

別峰紹印の入寺する寛永八年（一六三一）頃まで、永源寺の復興は遅々として進みませんでした。別峰は自らも土木作業に携り翌年には方丈を再建。後を継いだ竜山宗良、空子元普らにより寛永十五年（一六三八）には大鐘が鑄造され、同十九年にはようやく仏殿の造営がなされます。

寛永二十年（一六四三）、空子元普は、当時朝廷周辺から深い尊崇を得ていた一絲文守（一六〇八〜一六四六）を住持に迎えます。これにより永源寺は中興の時期を迎え、近世の体制が整えられてゆくのです。

52 別峰紹印像

如雪文岩賛 法橋徳心筆

絹本着色 縦二七・九cm 横五四・五cm 一幅

別峰は寛永八年（一六三一）、永源寺七七世文湖慧弘を継いで補住となった。もと熱田（名古屋）の龍珠寺にあったが、寂室の禪を慕い八風峠を越え永源寺にやってきたのである。別峰は自ら石を引き泥を運んで復興に携わり、その姿は寂室の再来といわれた。翌寛永九年には方丈が再建され、永源寺はようやく具体的な復興に向かい始める。

本画像は杖を持つ初老の別峰の姿を描く。賛は一絲文守の後を継いだ如雪文岩による。近世の安定をむかえ、改めて中興の礎を築いた別峰の業績が振り返られたのであろう。

53 空子元普法語

紙本墨書

重要文化財 永源寺文書のうち
縦二七・九cm 横五四・五cm
正保二年（一六四五）

一幅

永源寺七九世空子元普は、永源寺の今後を託すべき人物として一絲文守を見定めた。背景には、六角氏滅亡後これといった檀越を持たなかった永源寺を再び隆盛に導くには、新たな庇護者を得る必要があるとの判断があったとみられ、朝廷周辺から広い支持を得ていた一絲は適任とみなされたのだらう。寛永二十年（一六四三）、一絲は空子の請いに応え永源寺に入寺した。空子は一絲に付法し、伝来の寂室の法衣、自らの師龍山宗良の竹篋などを与えた。

本状は一絲からの付法の印證の求めに応じ、一偈を示し、また伝来の法衣等を授けたことを書き記すもの。

54 一絲文守墨蹟 生死事大無常迅速

紙本墨書

重要文化財 永源寺文書のうち
縦三二・二cm 横六三・九cm 江戸時代

一幅

一絲文守（一六〇八〜一六四五）は岩倉具堯の三男として生まれ、沢庵宗彭（一五七三〜一六四五）のもとに参じた。のちには時の左大臣近衛信尋、大納言鳥丸光広といった人々と親交を深め、後水尾天皇周辺からも深い帰依をうけた。

空子元普からの永源寺への招請をうけ、一旦は断ったものの、第八〇世住持となった。生来病弱であった一絲は住山わずか三年で没したが、彼を介して永源寺は貴顕の尊崇を得るようになり、近世の隆盛への足がかりをつかんだ。この功績から中興開山とされている。

(コラム) 世継観音と六角満高

永源寺の本尊観世音菩薩は、伝えによると開山寂室元光が悟都管なる仏師に作らせた塑像であったという。

永源寺の開創に尽力した六角氏頼(一三三六～七〇)は、長男義信が早世したのち養子を迎えていた。しかし氏頼が亡くなる前年の応安二年(一三六九)、突如氏頼に男子が生まれた。これが満高(一三六九～一四一六)である。

後世、満高の誕生は、永源寺の本尊観世音菩薩の功德であるとする話が広く伝えられるようになった。これについて中世にさかのぼる資料はしらないが、氏頼の晩年の寂室への帰依と劇的な満高の誕生、永源寺を支え続けた六角氏のイメージが、この話を生むにいたったのだろう。

永源寺の本尊観世音菩薩は「世継観音」と称され、子授けに利益があるとして信仰されてきた。近世以降には「世継講」などの存在が知られ、東海道の土山宿に天明八年(一七八八)に立てられた道標には、永源寺への道が「高林世継観音道」と案内されているなど、信仰の広まりがうかがえる。

55 永源寺由来

一巻

重要文化財 永源寺文書のうち

江戸時代

永源寺の世継観音は、開山寂室元光が、唐の悟都管という仏師に、唐の霊地の土で造らせた二尺二寸の坐像であること。寺の東に毎夜光を放っていた一寸八分(五cm強)ほどの観音像を寺に迎えて世継観音の頭部に造り籠めたこと。特に世継ぎを祈って靈験を蒙るものが多かったことなどを記す。

本縁起に六角満高に関する話は記されていないが、近世にまとめられた縁起類の中には満高の出生に触れるものも見られる。

(謝辞)

本展の開催にあたり、多大なるご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。
大本山永源寺

(凡例)

- 一、本展の展示資料はすべて永源寺の所蔵です。
- 一、本資料は平成17年8月27日から10月2日を会期として栗東歴史民俗博物館が開催する特別陳列「六角氏と永源寺」にかかる資料解説を編集したものです。
- 一、本資料の無断転載はお断りいたします。

特別陳列 六角氏と永源寺

会期 平成17年8月27日～10月2日

編集発行 栗東歴史民俗博物館

滋賀県栗東市小野二二三-八

電話 〇七七-五五四-二七三三

<http://www2.city.ritto.shiga.jp/nakubutsukan/>